

## チベットのデモと地酒「チンクー」

近藤 節夫

昨年 12 月チベットへ出かけた。話題の青海チベット鉄道に乗って、標高 5,000m の雲表の世界へ足を踏み入れてみたかったのと、中学生のころからの憧れだったポタラ宮殿を、しっかり自分の目で見ておきたいと思ったからである。幸いふたつの目的は叶えることが出来た。時を経ず、突然世界中を震撼させたあのデモ騒乱事件が起きた。チベットを訪れて僅か3ヶ月後のことである。

思い返してみると、秘かに騒乱事件の前触れらしき兆候はあった。ポタラ宮殿前で寸時「五体投地」を済ませ宮殿を振り返った時、いつの間にか空っぽだった駐車場に、重装備の兵士を満載した十数台の軍用トラックがやってきたのである。昼日中平穏な街のど真ん中に、なぜ武装した軍隊が出動する謂れがあるのか。あつという間の出来事だった。その時一介の旅行者の目には、兵隊さんのお昼休みにしてはととてもただ事とは思えなかった。

不意に勃発した騒乱事件は、中国政府の発表によればダライ・ラマ 14 世派の計略によって引き起こされたものだそうだが、実はその頃すでに街には、他にもデモを予知させる何らかの前兆があったに違いない。

標高 3,650m のポタラ宮殿の辺りは酸素が薄い。脈拍数は普段の二倍に跳ね上がっていた。息せき切って階段を上り下りしながら、かつてダライ・ラマが居住した宮殿を見学し、宮殿最上部から見下すと低い建物ばかりが軒を連ね、伝統のチベット文化に囲まれたラサ市内は、北京や上海のような近代高層ビルがひしめく大都会とはまるで別物に見えた。

実は、このとき小中陽太郎さんへ「われチベットに在り(吾在西蔵)」とメールを送った。折り返し「高山で酒飲むとどうなるの？」とご下問があった。

聞けば、観光立国とはほど遠いチベットでは、未だ伝統の地酒を近代的ホテルでは味わえないらしい。しかし、一般家庭では年寄りたちが祝い事や祭りのたびに秘酒らしきものを嗜んでいるようだ。「チンクー」と呼ばれるその秘酒の製法は、裸麦を醗酵させて2～3日後に蓋に清水をかけ、さらに2日ほど置くと秘酒「裸麦酒」が誕生すると聞いた。それは大宴会やホテルのバーなどではなく、家庭で樽に保存されたまま、客人が訪れた時に秘かに歓迎の徴として家長から提供されるのである。色は薄く甘酸っぱい味がする。高地のせいアルコール度数は15～20度と比較的低い。飲むにもしきたりがあって、もてなされた客人は杯一杯の「チンクー」を一口飲み、注ぎ足されたらまた一口飲み、三度目に注ぎ足された「チンクー」を一気に飲み干す。これを「三口一杯の酒」というそうである。

どこかでこの祝い酒「チンクー」にありつきたいものだと思っていた矢先、朗らかな

チベット人ガイドがウィンクしながら、「コンドーさ～ん！ 酸素が少ないですから、お酒はすぐ利いてきます。アルコールと熱いお風呂は控えてください」と冷酷な宣告があった。

チベットへ来ていながら、とびっきりの地酒を味わえず、未だに小中さんにもまともにお応えしていない。

(「酒だより」184号・2008年8月号)